

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 18 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520581

研究課題名(和文) 英語不定詞節における目的語の分布に関する通時的研究

研究課題名(英文) A Diachronic Study of the Distribution of Objects in English Infinitival Clauses

研究代表者

田中 智之(Tanaka, Tomoyuki)

名古屋大学・文学研究科・教授

研究者番号：20241739

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円、(間接経費) 1,170,000円

研究成果の概要(和文)：歴史コーパスを用いた調査により、定形節では(ある種類の目的語を除いて)14世紀に「目的語・動詞」語順が消失したのに対して、不定詞節では「目的語・動詞」語順が16世紀まで存続していたことが判明した。不定詞節においては「目的語・動詞」基底語順が消失した(定形節において「目的語・動詞」表層語順が消失した)14世紀以降も、機能範疇を伴わない構造が保持されていたため、「動詞・目的語」基底語順からの目的語の左方移動により「目的語・動詞」表層語順が派生可能であったと結論付けた。その後、16世紀に機能範疇を含む不定詞節の構造が確立すると、目的語の左方移動が不可能となり「目的語・動詞」表層語順が消失したのである。

研究成果の概要(英文)：The investigation based on historical corpora has revealed that object-verb (OV) order was lost in the 14th century in finite clauses (except for a certain class of objects), while it was retained until the 16th century in infinitival clauses. It has been concluded that infinitival clauses retained the structure without functional categories, so that surface OV order could be derived by leftward movement of objects from underlying verb-object (VO) order, even after the loss of underlying OV order in the 14th century (which caused the loss of surface OV order in finite clauses). Then in the 16th century, infinitival clauses established the structure with functional categories, where leftward movement of object is impossible, thereby leading to the loss of surface OV order.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：不定詞節 定形節 目的語 動詞 語順 フェイズ 機能範疇 不定詞形態素

1. 研究開始当初の背景

英語史における定形節の語順変化、特に動詞と目的語の語順変化に関しては、文献学、および生成文法等の理論言語学の観点から多くの研究がなされており、経験的データや歴史の変遷の全体像がある程度明らかにされている。

一方、定形節に比べると、英語史における不定詞節の語順変化はあまり注目されておらず、いくつかの先行研究で散発的なデータが提示されているのみであり(Wurff 1999, Moerenhout and Wurff 2005)、英語不定詞における目的語の分布の歴史の変遷の全体像が明らかにされていない。

これまで10年以上にわたる自分の研究の一部として、英語史における不定詞節の統語変化について、特に機能範疇の出現という観点から考察しており、さらに最近では、不定詞節の目的語が主節に現れる、いわゆる再構成と呼ばれる現象の研究にも同様の観点から取り組んでいる。したがって、定形節とは異なると考えられる不定詞節における目的語の分布の歴史の変遷について、これまで行ってきた不定詞節の統語変化に関する研究成果を生かしたアプローチが可能ではないかと考え、本研究の着想に至った。

2. 研究の目的

英語定形節における動詞と目的語の語順変化に関する先行研究を踏まえ、英語不定詞節における目的語の分布について調査を行い、その歴史の変遷の全体像を明らかにする。そして、最近の生成文法の枠組みである極小主義理論に基づいて、節構造の変化、特に機能範疇の出現という観点から、英語不定詞節における目的語の分布の歴史の変遷について理論的説明を与えることを目的とする。

3. 研究の方法

古英語から初期近代英語における不定詞

目的語の分布の歴史の変遷を明らかにするために、まず電子コーパスを用いた調査を行った。使用した電子コーパスは、The York-Toronto-Helsinki Parsed Corpus of Old English Prose (古英語)、The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English, Second edition (中英語)、The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English (初期近代英語)であり、補足的資料としてThe Parsed Corpus of Early English Correspondence (中英語、初期近代英語)も利用した。その際、定形節に関する先行研究と同様に、目的語の種類を否定目的語、数量目的語、肯定目的語に分け、それぞれの目的語ごとに分布の歴史の変遷を検証した。

そして、その調査から浮かび上がった不定詞節における目的語の分布の歴史の変遷について、極小主義理論に基づく説明を試みた。依拠した主要な理論的仮説としては、古英語と中英語が「目的語・動詞」と「動詞・目的語」両方の基底語順を持つとする二重基底部仮説(Pintzuk 1999)、およびフェイズごとに統語構造の線形化が行われるとする仮説(Fox and Pesetsky 2005)であり、定形節とは異なる目的語の分布について、不定詞節の構造変化と目的語移動の可能性の観点からアプローチした。

4. 研究成果

まず、英語定形節における動詞と目的語の語順変化、特に「目的語・動詞」語順の消失に関するPintzuk and Taylor (2006)の調査を補完するために、初期近代英語の電子コーパスを用いて調査を行った。肯定目的語については、初期近代英語第1期(1500~1569)の韻文テキストの一部で「目的語・動詞」語順がある程度の頻度で見られたが、その割合は中英語第4期(1420~1500)に引き続き1%未満であるので、15世紀以降は「目的語・動詞」語順が非文法的であったと結論付けられ

る。一方、数量目的語と否定目的語については、初期近代英語第1期における「目的語・動詞」語順の割合がそれぞれ2.3%と3.8%であるので(その後は1%未満となるが)、16世紀中ごろまでは「動詞・目的語」語順が文法的であったと考えられる。

以上の調査結果について、二重基底部仮説に基づく Pintzuk and Taylor (2006)の分析を踏襲しつつも、Fox and Pesetsky (2005)における統語構造の線形化のシステムを取り入れることにより理論的説明を試みた。まず、肯定目的語はフェイズ、特にvPのエッジを経由しないA移動の適用を受けるので、「動詞・目的語」基底語順からの目的語の左方移動は、CPとvPフェイズにおいて語順の矛盾を生じるため不可能である。したがって、「目的語・動詞」基底語順が消失した15世紀以降は、肯定目的語が動詞に先行する語順は許されなくなった。一方、数量・否定目的語はフェイズのエッジを経由するAバー移動の適用を受けるので、「動詞・目的語」基底語順からの目的語の左方移動は、CPとvPフェイズにおいて語順の矛盾を生じないため可能である。したがって、「目的語・動詞」基底語順が消失した15世紀以降も、数量・否定目的語が動詞に先行する語順が存続したのである。なお、16世紀後半に数量・否定目的語を伴う「動詞・目的語」語順は消失したが、その要因は数量詞の副詞的用法の衰退であり(Moerenhout and Wurff 2005)、それにより数量・否定目的語のAバー移動を駆動する素性が設定され得なくなったと分析する。

次に、英語不定詞節における動詞と目的語の語順変化については、先行研究では断片的な情報しかないので、電子コーパスを用いて、古英語から初期近代英語における不定詞節、特に先行研究において「目的語・動詞」語順が遅くまで保持されていたとされる、顕在的主語を持たないコントロール不定詞節にお

ける目的語の分布について調査した。その結果、数量目的語と否定目的語はデータが少ないために数値のばらつきがあるものの、肯定目的語、および目的語全体のデータから、不定詞節では定形節とは異なる目的語の分布が観察された。定形節と不定詞節における肯定目的語を伴う「目的語・動詞」語順の割合を時代ごとに示すと、古英語初期(-950)(56.7%:59.1%)、古英語後期(950-1150)(50.4%:37.4%)、中英語第1期(1150-1250)(28.4%:21%)、中英語第2期(1250-1350)(3.1%:12.6%)、中英語第3期(1350-1420)(1.3%:2.9%)、中英語第4期(1420-1500)(0.7%:0.8%)、初期近代英語第1期(1500-1569)(0.9%:1.7%)、初期近代英語第2期(1570-1639)(0.2%:0.5%)、初期近代英語第3期(1640-1710)(0.03%:0.1%)となった。

この調査から、不定詞節における目的語の分布の歴史的変遷について、以下の興味深い2点を読み取ることができる。第一に、肯定目的語については、古英語後期と中英語第1期を除けば、定形節よりも不定詞節の方が「目的語・動詞」語順の割合が全体的に高い。第二に、初期近代英語第1期において、不定詞節における肯定目的語と目的語全体のデータにおける「目的語・動詞」語順の割合はそれぞれ1.7%と2%であり、16世紀中ごろまでは「目的語・動詞」語順がある程度の頻度で観察される。ちなみに、肯定目的語の1.7%という数値は、定形節の場合と同じ特定の韻文テキストに「目的語・動詞」語順が集中していることが一因であるが、同じ条件の下で不定詞節の方が2倍近い数値を示している点は重要である。その後、初期近代英語第2期になると、不定詞節において「目的語・動詞」語順の割合が1%未満になるので、16世紀後半にほぼ消失したと考えられる。この消失時期は Moerenhout and Wurff (2005)の16世紀散文の調査結果と合致するものであ

る。

以上の調査結果を踏まえ、英語不定詞節における目的語の分布の歴史の変遷について、生成文法の枠組みにおいて理論的説明を試みた。定形節とは異なり不定詞節においては、「目的語・動詞」基底語順が消失した後も「目的語・動詞」語順が 16 世紀中ごろまで観察されるが、それには不定詞節の構造変化が関与していると考えられる。まず、古英語において不定詞標識 *to* は前置詞であり、それが *vP* と併合されることにより不定詞節の構造が形成され、そこでは *v* を占める不定詞形態素が *to* による格付与の下で外項として機能していた (Tanaka 2007)。この前置詞句の構造は不定詞形態素が存在していた 16 世紀まで続いたが、その一方で 14 世紀になると不定詞形態素の形態的具現化が随意的となり、それに伴って *to* が前置詞から機能範疇 *T(ense)* へと再分析された。それを支持する独立の証拠としては、Gelderen (1993) などで論じられている分離不定詞や代不定詞の出現が挙げられる。それに加えて、14 世紀に *wh* 句などの CP の存在を示す証拠が不定詞節で見られるようになったことから、この時期に不定詞節は古い前置詞句の構造に加えて、現代英語と同じ CP 構造を持つようになったと考えられる。この新たな構造においては、不定詞節の外項は *PRO* として *vP* の指定部に具現化され、TP の指定部に移動して、*C-T* の構造形の下でゼロ格を付与され、認可されるようになった。

以上の不定詞節の構造変化を仮定することにより、目的語の分布の歴史の変遷は以下のように説明される。まず、古い前置詞句の構造においては、外項が *vP* の指定部ではなく不定詞形態素として具現化されていたので、外項が受動形態素として具現化される受動文の *vP* と同様に、不定詞節の *vP* はフェイズではないと仮定することができる。したがって、この構造では *vP* において線形化が起

こらないので、目的語の種類にかかわらず「動詞・目的語」基底語順からの目的語の左方移動が可能である。ゆえに、「目的語・動詞」基底語順が消失した後も、この構造が存続した 16 世紀までは「目的語・動詞」語順が派生可能であった。その後、16 世紀中に古い前置詞句の構造が消失し、新たな CP 構造に一本化されると、不定詞節の外項は常に *PRO* として *vP* の指定部に具現化されるようになり、*vP* はフェイズとしての位置付けを確立した。したがって、定形節の場合と同様に、「動詞・目的語」基底語順からの目的語の左方移動が不可能となり、16 世紀中に「目的語・動詞」語順が消失したのである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 5 件)

Tomoyuki Tanaka (2014) "A Note on Modal Passives in Early English," 『近代英語研究』30. 近代英語協会・査読有

Tomoyuki Tanaka (2014) "The Distribution of Verb-Object Order in the History of English: A Cyclic Linearization Approach," *Studies in Modern English: The Thirtieth Anniversary Publication of the Modern English Association*, 251-266. 近代英語協会・査読有

Tomoyuki Tanaka (2013) "Cyclic Linearization and the Loss of OV Order in the History of English," *English Linguistics: Past, Present, and Future (Proceedings of the 2013 International Conference in English Linguistics)*, 393-397. 韓国英語学会・査読無

田中智之 (2012) 「統語と音韻のインターフェイス 動詞と目的語の語順をめぐって」『日本英文学会中部支部第 63 回大会 Proceedings』191-192. 日本英文学会中部支部 . 査読無

田中智之 (2012) 「再構成と非定形節における機能範疇の出現」『名古屋大学文学部研究論集』58, 69-88. 名古屋大学文学部 . 査読無

[学会発表](計3件)

Tomoyuki Tanaka “Cyclic Linearization and the Loss of OV Order in the History of English,” The 2013 International Conference in English Linguistics. (2013年7月5日: Korea Military Academy)

田中智之 「統語と音韻のインターフェイス 動詞と目的語の語順をめぐって」日本英文学会中部支部第 63 回大会シンポジウム (2011年10月30日: 名古屋大学)

田中智之 「不定詞標識 to の(脱)文法化について」名古屋大学英文学会第 50 回大会シンポジウム (2011年4月16日: 名古屋大学)

[図書](計3件)

中野弘三・田中智之 (編) (2013) 『言語変化 動機とメカニズム』159-174. 開拓社 .

田中智之 (編) (2013) 『統語論』1-28. 朝倉書店 .

大室剛志・田中智之 (編) (2012) 『ことばの形と意味 (名古屋大学大学院文学研究科公開シンポジウム報告書)』5-14. 栄印刷 .

6 . 研究組織

(1)研究代表者

田中 智之 (TANAKA, Tomoyuki)
名古屋大学大学院・文学研究科・教授
研究者番号 : 20241739